

先着
100名
参加無料

writing with fire

BLACK TICKET FILMS PRESENTS A FILM BY RINTU THOMAS & SUSMIT GHOSH. CO-WRITTEN BY SUSMIT GHOSH & KARAN THAPLIYAL. EDITED BY SUSMIT GHOSH & RINTU THOMAS. JOURNALS BY ANNE FABRE. ORIGINAL SCORE BY TALIBAR ALKAD. TITLE DESIGN AND CREDIT TRACK BY ISHAKAN CHIVARRA. SOUND DESIGN BY SUSMIT GHOSH. NATHI SOUND MIXING BY JANNIE LAINE. CO-WRITERS: SIDDHARTH MEER, ASSOCIATE PRODUCERS: BHUPESKA THOATRI & SUMIT DHARMA. CO-PRODUCERS: JOHN WESTER & TONÉ GRETT. JORD. GLENNE. CO-EXECUTIVE PRODUCERS: ANURAMA BHARGAVA. EXECUTIVE PRODUCERS: PATTY O'LEARY & HALLIE ADELMAN. PRODUCED BY SUSMIT GHOSH & RINTU THOMAS. WRITTEN AND DIRECTED BY RINTU THOMAS & SUSMIT GHOSH.



世界が絶賛！各国で30以上の映画賞を受賞！

燃えあがる 女性記者たち

世界は変わる、変えられる。

インド北部で、
被差別カースト・ダリトの女性たちが
立ち上げた新聞社「カバル・ラハリヤ」。
偏見や暴力にひるむことなく、
独自のニュースを伝え続ける
彼女たちのドキュメンタリー。

監督 リントウ・トーマス/スシュミト・ゴーシュ

2021年|インド|ヒンディー語|DCP|93分|原題: Writing With Fire

配給: きろくびと © BLACK TICKET FILMS. ALL RIGHTS RESERVED.

●東京都推奨映画 ●文部科学省特別選定(青年/成人向き)・選定(少年向き)

writingwithfire.jp

神戸女学院大学ジェンダーインスティテュート上映会 ドキュメンタリー映画の 上映&解説トーク

<日 時> 2024年 **11** 月 **24** 日 (日) 13:20~16:40 (受付13:00) ※途中休憩あり

<会 場> 西宮市大学交流センター 大講義室 (ACTA西宮東館6F)

<トーク> 菅野美佐子氏 (青山学院大学)

※上映後、北インドのジェンダーと女性の生き方について研究されている菅野先生に、
映画の社会背景や社会的インパクトについてご講演いただきます。

<申 込> <https://forms.gle/wsg8KTZXZYwzTUoEA>

こちらのフォームからお申込みください ※定員になり次第締め切ります



申込フォーム



心を奮い立たせる

ニューヨーク・タイムズ紙

魅力的で希望に満ちたドキュメンタリー

スクリーン・インターナショナル

最も感動的な
ジャーナリズム映画

ワシントン・ポスト紙

（ウッタール・プラデーシュ州）
インド北部にある国内で4番目に大きな州。人口は国内の州で最も多く約2億人に達している。

ニュースの波
「カバル・ラハリヤ」小さなメディアが
巻き起こすビッグウェーブ、世界で賞賛の声！

インド北部のウッタール・プラデーシュ州にあるダリト（ダリット）^{※注}の女性たちだけで立ち上げた新聞社「カバル・ラハリヤ」（“ニュースの波”という意味）は、紙媒体からSNSとYouTubeの発信を主とするデジタルメディアとして、新しい挑戦を始める。ペンをスマートフォンに持ちかえた彼女たちは、貧困とカースト、そしてジェンダーという多重の差別や偏見、さらには命の危険すらある暴力的な状況のなか、粘り強く小さな声を取材し続けていく。やがて、彼女たちの発信するニュースは、インド各地へと大きな広がりを見せるのだった——。

監督のリントウ・トーマスとスシュミト・ゴージュが完成までに5年の歳月を費やした長編ドキュメンタリー第1作となる本作は、2021年サンダンス映画祭ワールドシネマ・ドキュメンタリー部門の観客賞と審査員特別賞受賞を皮切りに、2021年山形国際ドキュメンタリー映画祭市民賞、第94回アカデミー賞[®]長編ドキュメンタリー賞ノミネートなど、世界各地の映画祭で30を超える映画賞を受賞、高い評価を得ている。



注：ダリト（ダリット）の本来の意味は“拘囚された（者）”。カースト制度の外側・最下層に置かれて「不可触民」として蔑まれ、人が触れる汚れた仕事を押し付けられてきた。現在は、法律でカーストに基づく差別を禁じ、不可触民制の廃絶と違反者への罰則も規定されているが、彼/彼女らに対する差別は根強く残っている。



メディアで人を守ることができる
——心の声を聴くことをあきらめない

「カバル・ラハリヤ」は、大手メディアが注目しない農村の開発や地方自治の問題を報道している。知識も経験も豊富な主任記者のミーラは、ニュースのデジタル化に戸惑う仲間を励ましながらも、自身の子育てと夫の無理解に悩んでいる。有望記者のスニータは、やる気も能力も十分だが、家族と世間からの結婚の圧力に疲弊し、新人のシャムカリは、自分の取材能力に自信が持たなくなっていた。それぞれの悩みを抱えながらも徐々に記者としての取材方法を獲得していったミーラたちは、次々と反社会勢力の存在や警察の怠慢などを明らかにしていく。そして、むかえた地方選挙。「カバル・ラハリヤ」の記者たちは、その最前線の取材へと飛び込んでいく。

燃えあがる
女性記者たち

監督・撮影・製作：リントウ・トーマス&スシュミト・ゴージュ 撮影：スシュミト・ゴージュ、カラン・タブリヤール 音楽：タジダル・ジュネイド
共同プロデューサー：ジョン・ウェブスター、トーマス・グロッドコルド＝ダレンネ 共同エグゼクティブプロデューサー：アヌリマ・バルガヴァ
エグゼクティブ・プロデューサー：パティ・タイリン、ヘイラー・エイデルマン 日本語字幕：福永詩乃 宣伝美術：中野香 宣伝：contrail 配給：きらくびと
2021年|インド|ヒンディー語|DCP|93分|原題：Writing With Fire ©BLACK TICKET FILMS. ALL RIGHTS RESERVED.
●東京都推奨映画 ●文部科学省特別選定(青年/成人向き)・選定(少年向き) writingwithfire.jp



【お問い合わせ先】
神戸女学院大学 ジェンダーインスティテュート
 ☎ : 0798-51-8545 ✉ : wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp
 🌐 : <https://www.kobe-c.ac.jp/gender-inst/>
 📷 :

後援：西宮市

※本イベントは神戸女学院大学ジェンダーインスティテュート研究助成を受け実施しております。